

擬制資本論試論

宮本義男

まえおき

1. 資本循環過程における貨幣資本と貨幣取引資本
および生産資本との関連
2. 株式資本と擬制資本
3. 兌換券および不換兌換券の「擬制資本」化
4. 擬制資本の諸形態

むすび

まえおき

擬制資本論を本格的に論議したのは、ヒルファーディングの『金融資本論』である。そこで検討されたのは、主として擬制資本としての株式、しかも株式発行にともなう「創業者利得」と銀行資本との関連であり、「創業者利得」の獲得によって銀行資本が自己資本の比率を高めるだけでなく、産業資本支配の資本力を如何に強めて行くかが細かく分析された。

もっとも「擬制資本」を資本の一つの「範疇」として取り上げたのは『資本論』であって、第3巻第5篇「利子と企業者利得への利潤の分裂。利子付資本」の第25章では「信用と擬制資本」という表題で、手形を中心とする「擬制資本」が論述されている。

したがって、「擬制資本」を資本の「範疇」として取り上げたのは必ずしもヒルファーディングが嚆矢ではないが、「擬制資本」の中心的役割を果たすものとして「株式資本」に光を当て銀行資本との関連を精細に検討したの

は、ヒルファージングの功績といわねばならない。

もっとも『資本論』が執筆された時期と『金融資本論』が発刊された時期は、いうまでもなく産業資本主義段階と独占資本主義段階という資本主義の発展段階の差異があり、また資本の形態も文字どおりの「私的資本」と「会社資本＝社会資本＝株式資本」という資本形態の差異が生じていたことも見逃してはならない。

しかし、それにしても、資本主義の発展段階の差異、新しい資本形態の発生と一般化について逸早く着目したヒルファージングの慧眼については称賛に値するであろう。

さて、本論文を「擬制資本論試論」と銘打ったのは、最近の経済関係の諸論文、諸評論を見ていると「擬制資本」に触れたものは皆無といってよい。バブル経済とか実体なき経済の繁栄といわれているものは、擬制資本による経済の牽引であって、擬制資本の実情を解明しなければ、今日の経済の現状を正確に把握することはできない。

そこで本論文では「擬制資本」と「信用」との関係を、その源泉に溯って反省し、「擬制資本」が現実の経済にどのような影響を与えているかを原理的に探究してみたいと考える。

1. 資本循環過程における貨幣資本と貨幣取引資本 および生産資本との関連

いうまでもなく産業資本の循環は次の定式で表現される。

$$G - W < \frac{P_m \dots P \dots W' - G'}{A} \begin{Bmatrix} W \\ + \\ w \end{Bmatrix} \begin{Bmatrix} G \\ + \\ g \end{Bmatrix}$$

G は最初に投下される貨幣資本であり、P は生産資本、P_m と A は生産資本を構成する生産諸手段と労働力を表わす。W' は新しく生産された商品

資本でこれから販売さるべきものである。G' は販売された商品資本から回収された貨幣資本と剰余価値（g）とを示す。

産業資本の運動は貨幣資本→生産資本→商品資本→増殖した貨幣資本の循環の反復であることは、周知のとおりである。この産業資本の循環運動の過程のなかから、貨幣資本の出納管理を専門に行なう貨幣取引資本と商品資本の購買販売を専門に行なう商品取引資本が生まれる。

「擬制資本」に将来直接に関連をもつに至るものは、この貨幣取引資本であるから、以下においては専ら考察の中心を貨幣取引資本に置くことにする。

貨幣取引資本は本来商業資本の一種であり、産業資本の循環に含まれる貨幣資本の出納、遊離貨幣資本、遊休貨幣資本の管理を業とするものであり、産業資本と同じ平均利潤を手数料として取得する資本であった。今日に至るまで続いている業務が「当座預金」口座である。

だがある時期に貨幣取引資本は貸付資本に転形する。「当座貸越」はその端緒であるといつてよい。つまりたんなる貨幣資本の出納管理だけでなく、貨幣資本を貸付ける資本＝貸付資本に転化する。その典型が商業手形の割引であろう¹⁾。

いうまでもないことだが、本来、商業手形は商品資本を土台にして振り出される信用証書＝債務証書であって商業信用である。商業手形は通常、現実の商品資本を代表するものと考えられる。ところが商業手形の割引となると、それは、手形割引と満期までの間、一定の利子を生む擬制資本とみなされる²⁾。『資本論』第3巻第5篇第25章「信用と擬制資本」で主として取り扱われているのは「商業手形の割引」による擬制資本の創出の実情である。

同時にこの章では「帳簿信用」による擬制資本の創造も指摘されていることに注目しなければならない³⁾。

商業手形の割引は、商業信用にたいする銀行信用の介入であり、それによって擬制資本が創造されるのだが、帳簿信用は、銀行信用そのものによる擬

制資本の創造であるといつてよい。

もともと貨幣取引資本の貸付資本＝銀行資本への転化は、貨幣資本と生産資本の運動を別個のものとする端緒であり、二つの資本の運動の背離を取り扱ったものが『資本論』第3巻第5篇第30章～第32章の「貨幣資本と現実資本 I, II, III」であることは周知の事実であろう。

貨幣資本と生産資本、または貨幣資本と現実資本の遊離と背離は、資本循環から遊離、遊休する貨幣資本の運動そのもののなかに胚胎するのだが、銀行資本が擬制資本を創造することによって、資本の循環とは別個の方法で貨幣資本を増加させるようになると、この二つの資本の遊離と背離は、一そう強固な基盤を確立するに至ることは、いうまでもない⁴⁾。

2. 株式資本と擬制資本

擬制資本の発生は、銀行信用と不可分離なものであることを以上において指摘した。そして銀行信用は銀行資本の生成とともに並行して発生するものであることも明らかになった。

いうまでもないことだが、これらの諸現象を生み出す基盤となる産業資本の循環とは、本来「私的資本」を内容とするものである。だが資本主義の発展、とりわけ信用制度の発展は「私的資本」を「会社＝社会資本」に変貌させる。銀行資本が集中管理するようになる資本循環から遊離、遊休する資本は、銀行資本の手において、すでに「私的」な性格を払拭され社会全体の遊離、遊休資本として管理されていることは、改めて指摘するまでもないことであろう。

だが産業資本の「私的」性格が目に見える形態で「社会的」なものに転形するのは、「株式資本」においてであろう。

『資本論』が執筆された資本主義の段階では、「株式資本」は極めて稀な資本形態であった。それでも『資本論』第3巻第5篇第27章「資本主義的生

産における信用の役割」において「会社＝社会資本」としての株式資本や株式投機について言及されている。

しかし「株式資本」が本格的に検討されるに至ったのは『金融資本論』であることは、いうまでもない。そこでは、「株式資本」が株式＝擬制資本として「創業者利得」の創出にどのような役割を果たし、銀行資本の強化、ひいては銀行信用に活躍の場を与えるかが克明に検討されている⁵⁾。

産業資本主義段階においても、銀行資本の登場によって資本循環の定式は、次のように変貌する。すなわち、

$$G_{\text{（貸付資本）}} - G_{\text{（借入れられた資本）}} - W < \frac{P^m}{A} \dots P \dots W' - G' - G'_{\text{（貸付資本の回取）}}$$

がそれである。すでにのべたように銀行資本が貸付ける資本は、資本の循環から遊離または遊休した社会全体の資本（これにさらに個人所得の貯蓄が加わる）であるから、それ自体、私的蓄積の限界を越えた社会資本であることは、いうまでもない。

株式資本は、私的資本の会社＝社会資本への転化を一そう徹底化する。それだけではなく、株式資本は株式＝擬制資本の成立と密接に結びついている。

株式資本が会社＝社会資本であるというのは、小額の資本も株式の売買によって蒐められ資本として機能するに足る資本となって投資される、いわば社会的規模で蓄積された資本だからである。だが、それが純粹の社会資本ではなく会社＝社会資本である理由は、株式によって社会的に蓄積された資本のなかに、必ず核になる資本があって、この核資本が会社＝社会資本の支配権を握っているからである。会社＝社会資本の支配権をもつ核資本にたいして、小額の資本は、いわば、その運命を核資本に任せ、それにたいして信用を与えるに等しい存在に過ぎない。株式資本が社会資本でありながら会社資本としての性格を払拭しきれないのは、このためである⁶⁾。

それと同時に、株式資本には次のような特色があることに注目しなければ

ならない。

第一に、小額の株式に分割された株式資本を大量に引受けるのは銀行資本である。

第二に、株式によって蒐集された会社＝社会資本は、貨幣資本として投資され産業資本としての循環を行なう。だが生産資本とりわけ固定資本として投資された資本は減価償却によって長期に亘ってしか回収されない。ここに本来、短期の流動資本に投資するのを使命とする銀行資本にとって固定化し長期化する投資を如何にして流動化し、短期化するかという課題が生じる。

第三に、この課題を解決するための制度が証券取引所における株式の売買であり、株式の擬制資本化にほかならない。

いうまでもないことだが、株式には配当が支払われる。この配当を一般利率で資本還元したものが株式の価格であり、株式の擬制資本化である⁷⁾。銀行資本は擬制資本としての株式を株式市場において売却することにより産業資本として固定化する資本を流動化することができる。しかし、銀行資本は株式を単に現金化するだけではない。「創業者利得」を加えて販売し、銀行資本の充実を一そう計ることができる。銀行資本による株式のプレミアム付販売、つまり株式の額面を上まわる販売がそれであろう。それによって、銀行資本は株式資本に投資した資本を回収しうるだけでなく「創業者利得」を獲得することによって銀行資本の一そうの充実を促進することができるのである。

株式の「擬制資本」化、それにもとづく「創業者利得」は、いわゆる「金融資本」主義と呼ばれる新しい資本主義の段階に対応して生まれた経済学範疇であって、その理論的展開が行なわれたのが『金融資本論』であることはいうまでもない。

さて貨幣資本は、産業資本循環の一段階を形成する資本であり、本来、産業資本の貨幣資本形態ともいうべきものであった。ところが、貨幣取引資本の分化独立、貨幣取引資本の貸付資本、銀行資本への転化は、貨幣資本を取

り扱う銀行資本をして産業資本に対立する、産業資本とは別個の独自の運動をする資本として自立せしめるに至った。

銀行資本が貸付資本として産業資本とは別個の運動をするようになる契機は、すでにのべたように、産業資本の循環から遊離、遊休した資本、所得からの貯蓄を扱うようになった時点に始まるのだが、銀行資本が銀行信用によって擬制資本を売買するようになると、その傾向は一そう強められる。

ヒルファーディングのいう「金融資本」とは、銀行資本が産業資本を支配する現象を指しているのだが、その是非はともかくとして、銀行資本が「擬制資本」の売買を通して巨大になり、産業資本は銀行資本の助力なくして、その活動を、も早維持することができなくなっていることは事実であろう⁸⁾。

そして銀行資本の巨大化と自立化を一そう促進したものは、株式資本の成立と株式の「擬制資本」化にあったことはいうまでもない。

われわれは「1.」において貨幣取引資本、銀行資本がどのようにして成立し、銀行資本による銀行信用が、その端緒において、「擬制資本」の創造と密接に結びついていることを指摘しておいた。

「2.」においては、株式資本の成立が、株式の「擬制資本」化を生み出し、それによって「創業者利得」が創出され、それを手に入れる銀行資本が自己資本の拡大を行なう過程を検討した。

「1.」と「2.」での考察を通じていえることは、銀行資本は、そもそものその発端から「擬制資本」と密接に結びついている、ということであり、銀行資本の活動には「擬制資本」を欠くことはできない、という認識であった。

ここ数年来の、いわゆる「バブル経済」とは、こうした擬制資本、とりわけ株式操作による銀行資本の蓄積が生み出した現象なのだが、それが擬制資本操作にもとづくものであるだけでなく、銀行資本がもともと擬制資本の成長と不可分離だということは、一般に認識されていない。

3. 兌換券および不換兌換券の「擬制資本」化

銀行資本が資本主義社会において活躍するためには、貨幣の発行権を握る中央銀行の存在が不可欠である。中央銀行が貨幣の発行権を握るのは、一方において、高利貸資本の勢力を押さえ、他方において、利子水準を平均利潤率の範囲にとどめて産業資本に「企業者利得」を保障し、その活動を育成するためであった。

中央銀行が発行する中央銀行券は、正貨準備が行なわれている場合には兌換券であり、正貨準備が行なわれていない場合には不換兌換券である。前者の場合には、正貨にたいして何時でも支払われる一覽払手形であることは周知の事実である。後者の場合には、国内においては正貨との交換は一切行なわれないから実質的には不換紙幣であるが、国際的な決済の場合には、正貨または世界貨幣に準ずる通貨で支払われるから、国際的には一覽払手形の性格を残しているといえるであろう。

いずれにしても、中央銀行券は、一般の銀行資本がもつ有力商業手形の再割引、公債、債券を担保に市中に中央銀行券を供給する。貸出される中央銀行券にたいして利子をとることは、いうまでもない。そして中央銀行券が擬制資本の役割を果たすのは、この過程によってである。

中央銀行券は、どのような理由で擬制資本になるのであろうか。こうである。

中央銀行から一般銀行資本に貸付けられた中央銀行券は、一般銀行資本の手で再び貸付資本として貸付けられるか、あるいは銀行資本相互間の手形決済に、支払手段として用いられるか、あるいは預金引出の支払いに使われるか、さまざまであろう。いずれにしても、終局的には市場において流通手段、または支払手段として機能することは、いうまでもない。流通手段または支払手段として機能した後、中央銀行券は、再割引された手形の支払い、

貸付資本の返済の形で中央銀行に還流する。そして、この還流が支障なく行なわれているかぎりでは、正貨準備の場合でさえ、正貨に転換することなく、「価値表章」として通用する。国内的に不換紙幣として通用している場合には、たんなる「価値表章」にすぎないことは、もちろんのことである。

ただの「価値表章」にすぎないもの、一覽払手形という「信用」が、利子を生む資本として通用する。これは明らかに擬制資本以外のなものでもない。

いうまでもないことだが、「価値表章」は、あくまでも「表章」であって「価値実体」ではない。いわんや「信用」そのものは人間の信頼関係であって「価値」ではない。「価値実体」のないものが貸付資本として利子を生むのは、それが資本に擬制されているからにはかならない⁹⁾。

貸付資本が銀行資本の主要機能の一つとなり、銀行資本と産業資本の対立関係が固定化すると、一定額の貸付資本が産業資本が生み出す平均利潤の分け前として利子をうるという関係は、歴史的社会的な関係としてではなく、「自然に存在する社会関係」だとみなされる¹⁰⁾。

一つの資本が最初は貸付資本として産業資本に貸付けられ、同じ資本が次に産業資本として運用されるという、同一資本の二つの機能によって平均利潤が、企業者利得と利子に分割されるという社会経済関係が忘れられ、一定額の貸付資本は必ず利子を生むという当然の関係、自然発生的な関係とみなされる事態、この事態が「価値実体」のない「価値表章」まで資本として擬制化することを可能ならしめるのである。

すでにのべたように、銀行信用は擬制資本の発生を促進した。商業手形の割引、帳簿信用、株式による創業者利得の取得がそれであった。銀行資本の頂点に立つ中央銀行は、「一覽払手形」としての中央銀行券を（兌換券の場合にも、不換兌換券の場合にも）擬制資本化する役割を果たすことになった。

つまり擬制資本の発生は銀行資本による銀行信用の創出とともに始まったと考えねばならない。

4. 擬制資本の諸形態

擬制資本とは一定の収入を一般利子率で資本還元することによって、生じる、いわば想定された資本のことである。額面 50 円の株式の配当が年 10 円であり、一般利子率が 5% であるとすれば、この株式の理論上の価格は 200 円となろう。この 200 円は年 10 円の利子を生む 200 円の擬制資本とみなされるのである。同じような計算は年間一定の地代をもたらす土地についても可能であろう。また一定の確定した利子を保証されている、いわゆる確定利付債券の場合でも、一般利子率の変動によって額面価格とは異なる相場価格がつくことは現実の証券市場が示すとおりである。

同じ手法で考えるならば、およそ信用制度が発達して正常な銀行資本が機能している場合には、予想外のものまでもが擬制資本化することは可能であろう。将来、確実に値上りが予想される稀少な絵画ですらも、擬制資本化させることは不可能ではない。予想される値上り利益を基礎として、投資対象としての利回り計算をすることは、投資として絵画を蒐集している投資家にとっては常識であろう。

外国為替手形は、為替相場の変動を一おう無視しても、内国商業手形同様に擬制資本となりうるが、為替変動を考慮すれば、それだけ投機の対象となりやすく、今日では有力な擬制資本であることは、いうまでもなからう。

ともあれ、特定の収益をもたらすものは、発展した資本主義の信用制度のもとでは、いわゆる利回り計算が可能で、擬制資本に転化させることができる、といっても過言ではなからう。

以上にのべた擬制資本の諸形態に共通するものは、一定収益の利回り計算であって、それは銀行資本の確立を前提とするものであった。

しかも、銀行資本の確立とともに普及するにいたった商業手形（外国為替手形を含めて）の割引は *Zirkulation ohne Zirkulationszeit* という「流通

時間なき流通」を目指す資本の要求に応じて生まれたものであった。

「帳簿信用」にしても、当初は銀行資本を強化して産業資本に貸付資本を提供する力を付ける以上のものだ、とは考えられない。

株式資本の株式の売却にしても、産業資本への資本の固定化を避けて、貸付資本の流動化を試みるのが、主たる目的の一つであった。

このように考えてみると、擬制資本は銀行信用によって生み出されたものとはいえ、擬制資本の創造そのものが当初から銀行資本の目的だったとは考えられない。銀行資本は、あくまでも「社会の総借手」「総貸手」の役割を営むものであった。

だが、資本主義が独占資本主義の段階に入ると、様相は一変する。

銀行資本は積極的に産業資本の運営に関与する。ヒルファーディングが銀行資本の金融資本への転化と呼んだ現象が、それである。

金融資本が銀行資本の転化したものか、それとも銀行資本と産業資本の「癒着」なのかは問わないにしても、金融資本と呼ばれる新しい「資本範疇」が生まれたことは否定できない。そして、この新しい資本範疇の生成によって、従来の銀行資本の機能にも変化が生じたことを見逃してはならない。

銀行資本が金融資本に転化することによって、銀行資本は「社会の総借手」「総貸手」の立場から一歩進んで産業資本そのものの経営管理に関与するようになる。それとともに銀行資本の自己資本の充実がなによりもの至上命令になるであろう。

そして擬制資本の創造が、その有力な梃子になることは言を俟たない。

1929年の世界大恐慌以降、資本主義が景気の自動調節作用を喪失して、国家権力の介入を見るに至ると、中央銀行は正貨準備制度を廃止して、不換兌換券の発行に踏み切る。これを契機として中央銀行は、擬制資本としての中央銀行券の増発によって、銀行資本の強化に力を注ぐようになる。そしてこの状況は今日に至るまで継続されている、といわねばなるまい。

む す び

バブル経済の崩壊という言葉が使われ始めて、久しい。ところでバブル経済の崩壊といわれるものは、株式の暴落と土地価格の下落に象徴されていて、それ以上の探究は経済学の世界でも未だになされていない。

株式の暴落、土地価格の下落に象徴されるバブル経済の崩壊とは、擬制資本による経済の拡大とその崩壊だと指摘したいのが、本試論の狙いであった。

本論において検討したように、擬制資本の発生は、銀行信用の発生と時を同じくするものであった。しかし、商業手形の割引にしても、帳簿信用にしても、いずれもが産業資本の循環＝再生産過程と密接に結びついているものであった。

商業手形が商品資本を代表するものであることは、いうまでもない。したがって、産業資本の循環と密着していることは、明らかであろう。

帳簿信用の場合でも、あるいは貨幣資本として、あるいは所得として流通する貨幣が、銀行資本の手に預金として還流するごとに貸付資本として貸出されると同時に、借り手の預金となって、預金創造＝貸付資本創造という擬制資本を生み出すのだが、この場合にも貸付資本貸出し、預金創造の過程は、貨幣資本または所得が産業資本の循環によって絶えず再生産されていることを前提にしている。

兌換銀行券の流通も、貨幣の流通手段としての機能、支払手段としての機能以外に、つまり産業資本の循環に沿う以外に、発券されることはなかった。さきにものべたように、中央銀行券は、たんなる「価値表章」として、擬制資本として機能するものではあるが、現実の産業資本の循環から全く背離するものではなかったのである。

これにたいして株式・土地（擬制資本）投機による資本の蓄積や所得の増

加は、産業資本の循環の外で行なわれる資本蓄積、所得の増加であることは一見して明らかであろう。

それだけではない不換兌換券（擬制資本）の供給が、株式と土地投機のために低金利でなされたことも無視できない。

本来の産業資本の循環の外から提供される、擬制資本による資本蓄積と所得の増加が、産業資本の活動を刺激したのが、バブル経済の実態だったのである。

このことを念頭に置かなければ、今後の資本主義経済の実態は把握できない。本論はその実態把握のための一試論であって、なお一そうの展開を試みたいと考えている。

〔注〕

- 1) 拙著『金融資本への道』（ミネルヴァ書房、1962）第2章「貨幣資本の諸機能と貨幣取引資本の銀行資本への転化」参照。
- 2) 同書第3章「貸付資本の自立的運動」第3節「銀行信用と貸付資本の自立的性」参照。
- 3) Das Kapital (Dietz Verlag, Berlin 1964), Bd. III, S. 420, 向坂訳『資本論』（岩波書店版）第3巻第1部、507—8 ページ。
「私が今日 A に預ける千ポンドが、明日は再び支出されて B への預金となることは、争うまでもなく本当である。明後日には、それが再び支出されて C への預金となる、ということが無限に行なわれるかも知れない。このようにして同じ千ポンドの貨幣が一連の移転によって、絶対に確定できない数倍の預金額になるかも知れない。だからイギリスにおける総預金の十分の九までもが、……銀行業者たちの帳簿上の記帳以外になんらの実存をもたないということはありうることである。」
- 4) 拙著『資本論入門』（紀伊国屋書店、1967）下、第20章「貨幣資本と現実資本」参照。
- 5) Vgl. Das Finanzkapital (Europa Verlag, Wien 1968), II Abschnitt, 岡崎訳『金融資本論』（岩波文庫）上、第2篇「資本の動員。擬制資本」参照。
- 6) 拙著『資本論入門』下、第18章「資本主義的生産における信用の役割」参照。
- 7) 「一般利子率」という表現には注意を払う必要がある。株式や公社債の場合には一年もの定期預金の利率が基準とされるといわれるが、いわゆる「利回り計算」の場合には、「利回り」の比較が行なわれる対象によって、短期の利率を使用する

場合もあることは、考えられることである。

- 8) 「金融資本」の詳細な概念規定はここでは行なわない。詳細については、拙著『金融資本への道』第5章「金融資本の構造」を参照されたい。
- 9) 兌換銀行券または不換兌換券の擬制資本としての性格を最初に指摘されたのは、飯田繁教授であった。飯田繁『利子つき資本の理論』（日本評論社、1954）第10章「信用と貨幣流通」四「いわゆる“資本の創造”と銀行の利潤」参照。
- 10) Vgl. Das Kapital, Bd. III 48 Kapital, Die trinitarische Formel, 向坂訳『資本論』第3巻第2部第7篇第48章「三位一体の定式」参照。